

塚田先生を偲んで

日本の話芸教室 生徒一同

「みなさん今日は——」教室を始めるときは、柔らかいあの声が聞けなくなりしました。私たちの友だち、塚田先生が8月2日に亡くなられたのです。二学期に入る前のことで、私たちはまさかという思いで受け入れることができませんでした。私たちシルバールの生徒は、

死がいつ来てもおかしくない人は多いですが、我々の教室では27名、前も入れれば相当な人数が先生の生徒だった。なのによりによってなぜ一番最初に逝ってしまったのか、せめて少しの間だけでもお別れの、そしてお礼の挨拶がしたかったという思いが全員にあるのです。シルバール大学にはえらい先生がたくさんいます。誰とでも仲良くなれる塚田先生は、おそろしく先生らしくない先生、私たちの友

だちみたいでした。教室では上から目線ではなく常に私たちの自主性を重んじた授業に徹していました。しかし日本の話芸教室は大風呂敷が必要でした。日本の話芸という以上、落語、講談、浪曲と沢山の芸能をマスターするために大変な苦勞をかけて調べて、毎回キャラクターいっぱい資料を積んで、埼玉の遠くから学校まで通ってきてくれました。先生は日本の芸能は何でも好きですが、本当はとりわけ浪曲と相撲が大好きでした。今年度の合

同講義に天中軒轟師を招いての浪曲会に全力を上げて取り組まれ大成功をおさめました。しかし、あの世に行くのにこんな手土産を持っていこうと思っていたのでしょうか。忘年会などで先生には思いつきうなってもらいたかったです。それはもちろんです。『日本土俵入り』ですね。『日本の話芸教室だより』という教科書先生は毎回欠かさず作って、それをもとに進行しましたが、最後になります。6月16日の

教科書では、自身の代行のことも書いてあり  
ました。私たちはきにもとめなかつたのです  
が、今それを見ると予感があつたのでしよう  
か。9月1日の二学期の初めの授業には、先生  
の奥様が来てくれました。ご丁寧な挨拶が悲  
しみを増して私たちの心にとどきました。ま  
た理事長先生ほか名だたる先生方も言葉をか  
けてくださいました。とまどつて何もしない  
私たちを助けて、まとめてくださったこと感  
謝を申し上げます。その話の中でこれからの  
こともふれていました。が、塚田先生は毎回新  
年度の最初に年間の講義スケジュールを立て  
て示してくれています。今年度もそれに準じ  
て進んでいきます。私たちの中には先生の後  
継者になり得る人もいますが、先生方の協力  
を得て、何よりも『日本の話芸教室』の灯を  
消さぬようみんなの手を組んでやってまいり  
ます。それが先生へのお礼と供養になればと  
一同思っております。

さて、私たちの頭の中の落語国にはこんな  
世界があります。それは『粗忽長屋』です。  
その有名なオチを先生に捧げます。長屋の熊  
さんが死体を抱いてつぶやくセリフです。  
「抱かれていますのはたしかに俺なんだが、抱  
いているのはいったい誰なんだろう……？」  
人間の重大題といわれるむつかしいことだけ  
ど、我々の先生への思いが伝わるのではない  
でしょうか。  
ご冥福を祈ります。  
合掌

